

# 生物の評価

## 生物の検証結果及び評価

項目		検証結果	評価
生態系	陸域ハビタット	<ul style="list-style-type: none"> <li>・植生及びその構成に大きな変化は見られない。</li> <li>・草地、人工草地、ヨシ原・オギ原の占める割合が高い</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・陸域ハビタットに、大きな変化は見られない。</li> </ul>
	水域ハビタット	<ul style="list-style-type: none"> <li>・堰上流は淡水域、堰下流は汽水域に分かれる。</li> <li>・堰直上流・直下流の河床材料は、砂・礫、シルトが主体</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・水域ハビタットに、大きな変化は見られない。</li> </ul>
魚類	確認状況の経年変化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・確認状況に変化は見られない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・堰上流における魚類の生息状況の変化は概ね収束し、安定している。</li> </ul>
	重要種の経年変化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・河口堰地点におけるカマキリ(アユカケ)やウツセミカジカ(回遊型)の稚魚の遡上や堰上流域での成魚の生息が継続して確認されている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・河口堰上流域でカマキリ(アユカケ)、ウツセミカジカ(回遊型)は継続して確認されており、河口堰の影響は認められない。</li> </ul>

# 生物の評価

## 生物の検証結果及び評価

項目		検証結果	評価
魚類	特定外来生物の確認状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>・河口堰の運用後、オオクチバス、ブルーギル等が堰上流域で継続して確認されているが、生息状況に大きな変化は見られない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・堰上流域の生息状況の変化は概ね収束し、安定している。</li> </ul>
	注目種の経年変化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・河口堰の魚道は十分に機能を果たしており、問題は見られない。</li> <li>・河口堰運用後のアユ遡上数は年によって変動し、一定の変化傾向は見られない。また、堰地点のアユの全長組成は、経年的に一定の変化傾向は見られない。揖斐川、長良川、木曾川の中流域における全長組成は、最大値に変動はあるが、三川とも全長の小さいアユが確認されており、全長の中央値は同等である。</li> <li>・サツキマスの入荷数は年によって木曾三川全体で変動が見られ、長良川産も同様に変動している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・稚アユの遡上及び全長組成に対する河口堰の影響は認められない。</li> <li>・アユの全長組成に対する河口堰の影響は認められない。</li> <li>・サツキマス遡上数の変化に対する河口堰の影響は見られない。</li> </ul>

# 生物の評価

## 生物の検証結果及び評価

項目		検証結果	評価
底生動物	確認状況の経年変化	・底生動物の確認状況に変化は見られない。	・堰上流における底生動物の生息状況の変化は概ね収束している。
	特定外来生物の確認状況	・河口堰の運用前から、カワヒバリガイが堰上流域で継続して確認されているが、生息状況に大きな変化は見られない。	・堰上流域の生息状況の変化は概ね収束している。
	注目種の経年変化	・ヤマトシジミは、堰下流では継続して確認されている。	・堰下流におけるヤマトシジミの生息状況に変化は見られない。
植物プランクトン	確認状況の経年変化	・堰上流域では、珪藻綱、次いで緑藻綱が、堰下流域では珪藻綱が優先している状況に変化は見られない。	・植物プランクトンの発生状況の変化は概ね収束し、安定している。

# 生物の評価

## 生物の検証結果及び評価

項目		検証結果	評価
植物	確認状況の経年変化	・植物の確認種類数は、横這いか増加傾向で推移しており、多様性が低下する傾向は見られない。	・植物相の多様性は維持されている。
	特定外来種の確認状況	・河口堰の運用前から、アレチウリの生育が継続して確認されており、確認範囲は増加傾向にある。	・分布範囲が拡大した可能性がある。
	注目種の経年変化	・ヨシの分布状況は、ほぼ横這いの状況である。	・ヨシ原は概ね維持されている。
鳥類	確認状況の経年変化	・確認状況に変化は見られない。	・鳥類の生息状況の変化は認められない。

# 生物の評価

## 生物の検証結果及び評価

項目		検証結果	評価
両生類・ 爬虫類・ 哺乳類	確認状況の経年変化	・両生類・爬虫類・哺乳類共に確認状況に年変動はあるが、一定の変化傾向は見られない。	・両生類・爬虫類・哺乳類の生息状況について、一定の変化傾向は認められない。
	重要種の経年変化	・カヤネズミは、堰上流域で継続的に確認されている。	・カヤネズミの生息に対する河口堰の影響は認められない。
	特定外来種の確認状況	・河口堰の運用前から、ウシガエル、ヌートリアが継続して確認されているが、生息状況に大きな変化は見られない。	・堰上流域の生息状況の変化は概ね収束している。
陸上昆虫類	確認状況の経年変化	・確認状況に変化は見られない。	・陸上昆虫類の生息状況の変化は認められない。

# 生物の評価

## 生物の検証結果及び評価

項目		生物の状況	検証結果	評価
環境 保全 対策	ヨシ原再生 事業	<ul style="list-style-type: none"> <li>ヨシの被度面積は施工1年目から2年目にかけて増加傾向を示す。</li> <li>オオヨシキリやカヤネズミ、トンボ類が、再生したヨシ原やその周辺で継続的に確認されている。</li> <li>基盤面の比高が高い場所では、木本群落やセイタカアワダチソウ群落の侵入が見られる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ヨシ原は、造成後概ね順調な生育がみられた。</li> <li>ヨシ原への依存性が強い鳥類、哺乳類、トンボ類が、再生したヨシ原やその周辺で継続的に確認されている。</li> <li>基盤面の高さにより、他の植物が侵入しやすい可能性がある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>再生したヨシ原は、鳥類、哺乳類、トンボ類の生息場として機能しつつあると考えられる。</li> <li>他の植物が侵入した場合、ヨシ原に依存する動物の生息に影響が及ぶ可能性がある。</li> <li>今後、木曽三川下流域自然再生検討会の意見を踏まえ、モニタリングを継続していく。</li> </ul>

## 今後の課題

- 今後も河口堰及びその周辺の環境変化に留意し、フォローアップ調査等により生物相の変化状況についてモニタリングを行っていく。  
なお、分布範囲が拡大した可能性がある特定外来種のアレチウリについては、拡大を抑制する対策を検討していく。